

いまぼり
四国・今治
IMABARI

今治スタイル

共に創る今治の未来

共創編



Take free

パン屋Paysan三代(大島 吉海町)

imabari style
VOL.5 2020.01



共創編

今治スタイル

共に創る今治の未来

いまぼり
四国・今治
IMABARI

Take free

樹齢約100年。人々を見守り続ける、無量寺のしだれ桜(朝倉)

2020.01

今治スタイル vol.5

【 共創編 】

Contents 目次

- 3 …… **THEME 1 ふるさと探訪**
Trip.01 美しき里山 よみがえる緑
朝倉 笠松山
- 5 …… Trip.02 百年の時を刻む要塞で世界平和を願う
小島 芸予要塞 小島砲台跡
- 7 …… Trip.03 神が鎮まる山 天空の絶景
大三島 鷲ヶ頭山
- 9 …… **THEME 2 共にはたらく**
Case.01 島とアート
今治市地域おこし協力隊 有吉かな子さん
- 11 …… Case.02 本と珈琲の店をつくりたい
こりおり珈琲&文庫 千々木大介さん 涼子さん
- 13 …… Case.03 この町には、かねとがある。
かねと食堂
- 15 …… Case.04 町の日常に溶け込む
達川ペーカリー
- 17 …… **THEME 3 共に育む**
知らなかった こんなキャンパスライフ
File.01 子どもたちに、多様で独創的な体験を。
豊島吾一さん
- 19 …… File.02 新しい大学でラグビー部をつくる
ロス・ルーシー・桃子さん
- 21 …… アイアイ今治キャンペーンって!?
- 22 …… あなたの i'm into をおしえてください!
Information

Cover Photo



今治スタイルVol.1で取材をさせていただいた Paysanの求さんご一家。大島に移住した当初は幼稚園児だった息子さんたちもすっかり大人に。長男大地さんは結婚し子供も生まれ、現在、三世代で大島に暮らしている。愛犬サザエは二代目番犬。

笠松山から今治市街地を望む

朝倉のシンボルでもある笠松山は標高357m。頂上からは、朝倉の田園風景から今治市街地、さらに来島海峡大橋と芸予諸島の島々が見渡せる。

私たちは普段、たくさん物や人に囲まれて暮らしています。

社会のつながりの中で生かされていることに気づいた時から、目の前に広がる景色は、変わってゆくのもかもしれません。

今治スタイルvol.5のテーマは「共に創る今治の未来」

共に生きることの大切さを、あらためて考えてみたいと思います。

あなたも、どこかで誰かを支えています。自然と、町と、人と、つながることで生まれる未来を、一緒に見てみませんか。

今治スタイル



南北朝時代、笠松山は世田山と共に合戦場となった。笠松山は伊予の豪族河野一族が居城としていたというが、まさに自然の要害としての条件を備えている。

Trip.01

美しき里山 よみがえる緑

朝倉 笠松山

笠松山は、朝倉平野の中にそびえる町のシンボル。一時間ほどで頂上に着く人気のハイキングコースにもなっている。頂上からは、朝倉の田園風景から今治市街地、さらに来島海峡大橋と芸予諸島の島々が見渡せ、天気の良い日には石鎚連峰や高縄山系まで大パノラマが堪能できる。標高三五七mながらその山容は堂々としており、今治市街地からもよく見える。しかし、今、山を見上げると、ところどころ緑がなく、山肌が透けて見える箇所がある。これは、約十年前に発生した山火事によるものだ。

二〇〇八年八月に発生した笠松山の火災は、地元の人にとって忘れ



左上:頂上にある笠松観音堂は、笠松城主篠塚伊賀守が笠松城を脱出する際に、一寸八分の黄金の千手観音を麓の寺に安置したことに由来している。火災の際、間近まで火の手は迫ったが懸命の消火活動により焼失は免れたようだ。**左下:**頂上の観音堂に「笠松山ふれあいノート」という思い出帳が置かれており、多くの登頂者がメッセージを寄せている。**右上:**斜面に植樹した木が少しずつ育ってきている。**右下:**多くのボランティアが植栽に協力した。写真は越智さんがリーダーを務める「あ・さくらの会」のメンバー。

越智将人さん



とができない出来事だ。火の勢いは凄まじく、山全体が燃えるような勢いで延焼し続け、発生から数日間燃え続けた。当時のニュース映像には、夜の闇をメラメラと焦がす炎が山肌を舐めてゆく光景が映し出されていた。六日後に鎮火されたが、約一〇七ヘクタールを焼失。黒く焼け焦げた山の姿は痛々しく、笠松山を見上げるたびに胸が痛んだ。

あれから十年の歳月が流れ、笠松山の緑は少しずつ回復しつつある。それは、自然の持つ回復力もさることながら、多くの人々の努力の結晶といえる。火災から数か月後には、復旧計画が立案され、国、県、地元が一丸となり動き出した。その中でも地元ボランティアの果たした役割は大きかった。行政と役割を分担し、互いに協力しながら、地道に植栽を行なってきた。これまで笠松山復旧に関わってきたボランティア団体は三十近くもあるそうだ。その中でも十年間積極的に活動してきたのが、朝倉で造園業を営んでいる庭師の越智将人さんだ。

「子どもの頃から笠松山はずっと自分の近くにあったので火災はショックでした。毎日眺めている笠松山を何とかしたいと思って、ボランティアで植樹したいと市の方に相談したことがきっかけです。」と越智さんは語る。

そして、せっかく植林するのであれば、奈良の吉野山のように桜を植えたいと考えた。庭木に関してはブロの越智さん、火災跡地の土を持って、桜守の十六代佐野藤右衛門氏を訪ねて京都まで行き、この土で桜が育つかどうか相談したそうだ。最終的に越智さんが植栽に選んだ桜は、園芸種のソメイヨシノではなく、ヤマザクラ。ソメイヨシノのような派手さはないが、可憐でさまざまな色をつけ、寿命も長いやるからには十年は続けると宣言し、自費で少しずつ苗を購入、植栽ボランティアを募り毎年約三十名ほどが桜などの植林活動を行ってきた。これまでに越智さんらのグループが植林したヤマザクラは、二千本を越える。十年前に植えたヤマザクラは、小さいながらも花を咲かせはじめたという。

これらの木々が成長し、緑で山を覆い尽くすには、まだしばらくの歳月がかかるだろう。しかし、何年か、何十年か先には、しっかりと山に根差す。ヤマザクラが咲き誇る笠松山の風景を、未来の子どもたちに遺したい。世代を越え、地域を越え、多くの人の力で、想いのリレーは続いていく。





北部砲台跡の発電所跡



Trip.02

百年の時間を刻む要塞で 世界平和を願う

小島 芸予要塞 小島砲台跡

日本三大急潮のひとつ、来島海峡に浮かぶ小島^{おしま}。周囲三キロほどの小さな離島に、明治時代に造られた巨大な要塞が今もなおその姿を残している。

波止浜港から、来島^{くわしま}、小島^{おしま}、馬島^{うましま}の三島を結ぶ一日十便の定期船が出ている。小島まで十分ほどの短い船旅だが、造船中の巨大な船を海上から間近で見たり、大迫力の来島海峡大橋を真下から見上げたり、普段味わう

ことのできないユニークな体験ができるのも面白い。激しい潮流を掻き分けるように船は進む。中世、来島海賊が城を築いたと伝わる来島で数名の乗客を降ろした後、五分ほどで小島に到着した。

観光案内の看板には、港周辺の小さな集落以外は全島が要塞、という驚くべき島の姿があった。島内には遊歩道が整備され、案内標識を頼りに要塞を巡ることができ。最初に向かったのは、島の南西端にある探照灯跡。夜間に海峡を往来する船舶を確認するための照明で、遠方まで照らすことができたそうだが、現在は台座を残すのみ。海からの砲撃から身を守るように、山をくりぬき、石で固めた堅牢な造りの地下室跡が残っていた。

赤煉瓦の発電所跡は、長年の風雨に晒され、内壁は剥がれ傷んでいる。しかし、百年以上前の建造物とは思えない保存状態に驚かされる。ここで発電し、探照灯に電気を供給しており、要塞の中だけではあるが、小島に電気が点いたのは今治や松山よりも早かったそう。

ロシアとの緊張が高まり、日露戦争開戦の暗雲が立ち込めてきた十九世紀末期、当時の日本政府はロシア海軍の瀬戸内海への進攻に備え、広島県

の大久野島と小島に砲台要塞の建築を開始した。ここ小島には、中部、北部、南部砲台を構築し、司令塔、弾薬庫、火力発電所、地下兵舎などの設備が造られ、一九〇二年に完成した。現在の価値に換算すると百億円ともいわれる巨費を投じた工事は、無筋コンクリートの曲面天井や、煉瓦造りのアーチなど当時の最新技術が導入された。しかし、対馬沖にてバルチック艦隊を撃破し、ロシア軍侵攻の可能性がなくなったため、この要塞は実戦に使われることなく、役割を終えた。

芸予諸島の小さな島に築かれた巨大な要塞は、百年の時を経てその面影を残しながら静かに佇む。生い茂る緑に囲まれ、凜と建つさまは、異次元の世界へ誘うかのような幻想的な雰囲気満ちている。ラピュタの世界感、と巷で言われていることもあながち間違いではないだろう。

明治、大正、昭和、幾度の戦争を乗り越え、ようやく平和な国となった日本。司令塔跡からは、今治市街地から来島海峡大橋、芸予諸島の島々まで一望することができる。眼下に広がる来島海峡を今日も多くの船が行き来する。吹き抜ける潮風はやさしく、心を解き放つような大らかさに満ちている。



左上:探照灯跡。石の階段と赤煉瓦で築かれている。 右上:中部砲台跡に残る地下兵舎跡
左下:弾薬庫跡。現在は屋根が落ち煉瓦造りの壁面が残るのみ 下中:海岸から来島海峡大橋が見える。 右下:北部砲台跡には爆撃演習による爆破跡が残る。



山頂からの絶景

Trip.03

神が鎮まる山
天空の絶景大三島 わしがとうさん
鷲ヶ頭山

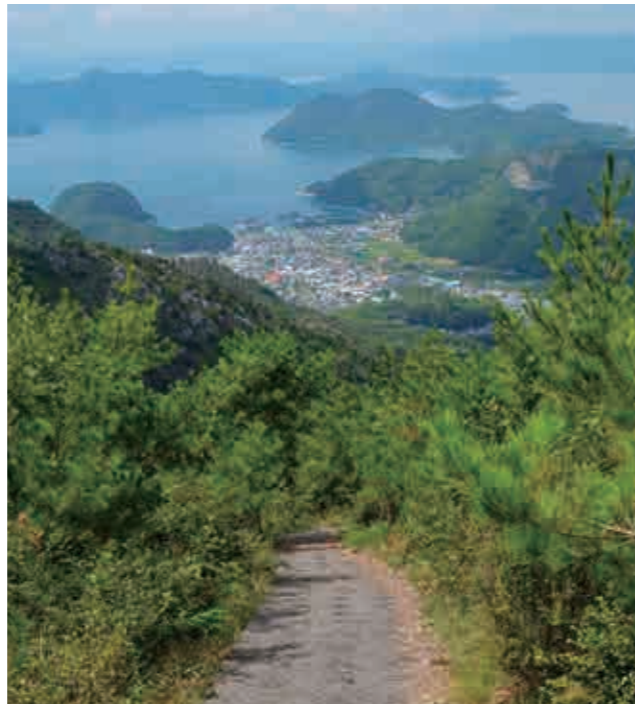
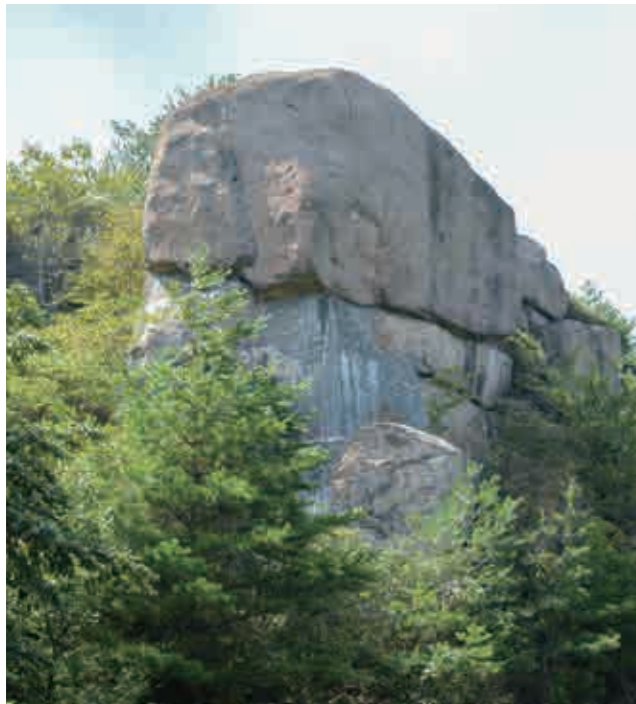
瀬戸内海のほぼ中央に位置する大三島は、日本総鎮守「大山祇神社」が鎮座する神の島として古来より崇められてきた。海の神、山の神、そして戦いの神として、歴代の朝廷や名だたる武将から崇敬を集め、武器甲冑をはじめとした多数の宝物が収められたことから、「国宝の島」とも呼ばれる。

大山祇神社のご神体山のうちの二つが、神社の背後に聳える「ラミッド型」の安神山あんじんざんと、大三島最高峰の鷲ヶ頭山わしがとうざんだ。

安神山は、麓で赤土を採取する神事が行われるなど、今なお大山祇神社との結びつきが強い山である。大山祇神社を現在地へ遷宮した際に五

ポット。

ちなみに、山頂近くまで車ででも行くことができる。ただし、尾根伝いに続く道路は細く、離合ができない場所が多いため運転には十分注意が必要だ。徒歩でも自転車でも車でも、大三島の最高峰を制覇した達成感はないかなかのもの。機会があれば是非訪れてみてほしい。



左:安神山、鷲ヶ頭山にはいくつも威厳ある巨石が点在している。 右:登山道を振り返ると美しい景色が広がる。

龍王が祀られたと伝わり、龍神の祠がある山頂は、戦前、雨乞い祈祷の場所ともなっていたそうだ。また石鏹大神の碑もあり、鎖場も存在する。麓の安神山わくわくパークから始まる鷲ヶ頭山自然研究路がメインの登山道で、愛好家には人気のコースでもある。

鷲ヶ頭山は古くは「神野山(神ノ山)」と呼ばれた霊峰。神野山がなぜ、鷲ヶ頭山と呼ばれるようになったのかは諸説あるが、南北朝末期に編纂されたとされる神道集「三島大明神事」に、鷲に攫さらわれた子が万民の王となったことから、鷲にも神明の法を授け、伊予の国一宮の御殿前に社を立て鷲大明神として大切に敬った、という内容の記述があり、これに由来しているという説が有力のようだ。

そんな歴史ある鷲ヶ頭山は、標高四三六・五m。大山祇神社から安神山を経由し、鷲ヶ頭山の山頂までは約五キロのコース。頂上手前はかなりの急斜面で息が上がるが、振り返ると海と島々、これまで歩いてきた稜線がゆるやかな曲線を描き、その素晴らしい景色に疲れも吹き飛ばす。山頂からは、生口島や伯方島など、芸予諸島の多島美が堪能できる。遠くに来島海峡大橋を望み、天気の良い日は石鏹山脈まで見渡せるといふ絶景ス



麓から見る安神山(右)と鷲ヶ頭山(左)



大山祇神社拝殿



Case.01

島とアート

今治市地域おこし協力隊
有吉かな子さん

Case.02

ブックカフェを
つくりたい

こりおり珈琲&文庫
千々木大介さん 涼子さん

Case.03

この町には
かねとがある

かねと食堂

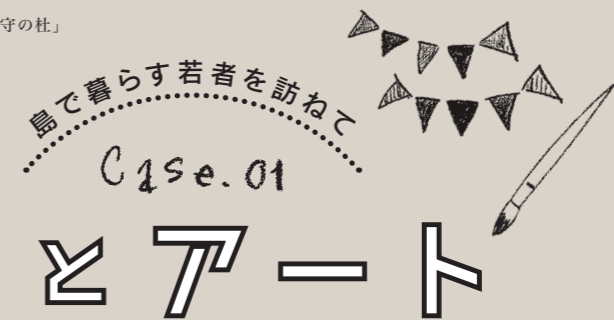
Case.04

町の日常に溶け込む

達川ベーカリー



有吉さん。保育所として使われてきた施設を「鎮守の杜」としてコミュニティスペースとして使用している。



今治市地域おこし協力隊
有吉かな子さん



「鎮守の杜」と名付けられたその場所は、十年ほど前まで保育所として使われていたという。木造の廊下、木の窓枠、時が止まったようなこのレトロな空間を拠点に、アートをテーマにさまざまな活動をしている有吉かな子さん。出身は埼玉県、二〇一七年に京都市立芸術大学を卒業後、地域おこし協力隊として伯方島に赴任した。

島の秘密基地

鎮守の杜には、カラフルな天井画が描かれている。風景や動物、植物、人の顔などバラエティに富んでいて、眺めているだけで楽しい気分になる。もともとシンプルな白い天井だったが、島の人が描いた絵に貼り換え、天井画を完成させようと有吉さんが計画した。京都芸大の学生を講師に迎え、ワークショップを開催、子どもからお年寄りまで幅広い年代の方が参加して思い思いに描いた。「アートを通して島の人たちに特別なつながりを感じてほしかった。」と話す有吉さん。ほかに、岐阜の友人から譲り受けたタイルを使い、手洗い場を島の子どもたちとリフォームしたり、島の高校でアートゼミを開催したり、島民をまるごとアーティストにしてしまおうユニークな取り組みを行っている。



左上:有吉さんが地元の子どもたちとタイルを張ってリノベーションした手洗い場。右上:天井絵。カラフルでポップな作品が展示されている。左下:普段絵を描くことのない地元の人も参加して天井絵が描かれた。右下:地元の高校で講師としてアートの授業を行っている。

子どものころから絵を描くのが好き、ものを作るのが好きだったという。高校は美術科に進学、大学では木版画を専攻し、アートはいつも一番近い存在だった。普段は伯方支所に勤務し、ちらしのデザインをしたり、地域活性化イベントの企画準備などをしたりしている。伯方島の校の名所「開山のガイドマップ」も有吉さんのデザイン。昨年は大三島美術館から声がかかり、木版画の展示会を開いたそう。

自分の好きな場所で、自分を好きでいられる働き方をする、それが有吉さんのスタイル。その根本にあるのは、伯方島が大好きで、もつとたくさんの人を知ってほしい、もつとしい場所になつてほしいというまっすぐな思い。島の人たちと共に作り、育んできたアートな秘密基地は、地域の人々をつなぐ大切な宝物になった。有吉さんのもうひとつの故郷がここにある。

そんな時、地域おこし協力隊のこのとを知る。大阪で開催された愛媛県の説明会に参加して、面白そう！と興味を持ったそう。協力隊の先輩方の生の声を聞いたこともよかったという。とんとん拍子に話は進み、大学卒業後、伯方島に赴任した。「実は、引越してきた日が伯方島初上陸

好きなきことを
やり続けたい



島で暮らす若者を訪ねて
Case.01

本と珈琲の店を つくりたい

こりおり珈琲 & 文庫
千々木大介さん 涼子さん



1杯ずつハンドドリップで丁寧に
コーヒーを淹れる大介さん

「しまなみ海道随一の絶景を誇る龜
老山展望公園。その駐車場の片隅に
紺色のキッチンカーが一台止まっている。
車内で静かにコーヒーを淹れているのは、こりおり珈琲の店主、千々木
大介さん。二〇一七年四月に妻の涼子
さんと、しまなみ海道、大島の吉海町
に移住した。」

導かれ、移り住んだ 瀬戸内の島

大介さんは大阪府出身、涼子さんは北海道出身。共に大手の書店に勤務していて、大介さんが函館店に転職になった際に、涼子さんと出会った。コーヒーが好きだった大介さんはいつかお店を持ちたいと考えていたという。「でも僕には接客や飲食店勤務の経験がなかったんです。だから独立支援をしているカフェで働きながらノウハウを学ばせてもらうことにしました。」そのカフェは栃木県にあった。二人は書店を退職、北海道から栃木県へ移住する。一年半ほどそこで経験を積み、開業に向け本格的に場所探しを始めた。

「温暖な気候や海が近くにあること、災害が少ないなどの自分達の希望条件を考えたら、瀬戸内地方がいいなと思って探していました。」東京で開催された移住者フェアに参加した際、大三島で地域おこし協力隊として活躍していた小松さん(まるまご)の話聞いた。島に移住」というと不便なイメージがあるが、この地域は瀬戸内しまなみ海道で四国にも本州にもつながっており生活に不便はなく、商圏も十分にあることを知る。また、今治市には地域おこし協力隊

の先輩がたくさんいて、任期終了後も定住している人が多いことも決めのひとつだったという。

こうして、ふたりは大島にやってきた。涼子さんは地域おこし協力隊として採用され、三年の任期で吉海支所に勤務している。

一歩ずつ、着実に。

移住後、大介さんは開業のための準備をはじめた。涼子さんは吉海支所に勤務しながら少しずつ住民とのつながりを広げていった。小さな島の

こと、珈琲屋を開こうとしている若い移住者の噂はすぐに広まり、協力者が現れ始める。当初は軒下にテントを張って営業していたが、その後軽バンを購入、塗装してキッチンカーに仕立てた。「自分たちだけでは何もできませんでした。島の皆さんが助けてくれて本当にありがたかったです。」と振り返る。

キッチンカー営業で着実に知名度を上げていった二人の次の目標は、実店舗の開業。二〇二〇年春オープンを目指し島内の古民家を購入し、自分たちの手でリノベーション中だ。本が縁で知り合ったふたり。つくる

うとしているのは、本とコーヒーが楽しめるお店。島内には図書館がなく、書店も一軒もないことから、「観光客向けというよりも、島の人が気軽に立ち寄れる店にしたい。」とふたりは語る。地元の人がたくさん応援してくれたから恩返ししたいのだという。

人とのつながりを大切にし、ここで暮らしを丁寧に育んできたふたりだからこそ、多くの人が支えてくれたのだろう。島の豊かな自然と温かい人たちに囲まれて、ふたりの物語は新しいページを紡いでいく。



上:移動販売は基本的に大介さん一人で行っているが、イベント出店時は涼子さんもお手伝い。涼子さんは接客担当。 中:2020年春のオープンを目指す。古民家がどんな風生まれ変わるのか楽しみ。 右下:梯子にのぼりプロ顔負けの手つきで壁を塗る涼子さん。 左下:大工仕事の経験はなかったという二人だが古民家を自分たちの手でリノベーションしている。



Case.03

かねと食堂

創業50年以上の店を訪ねて

この町には、かねとがある。



親子三代にわたって通い続ける常連客がいる。帰省したら必ず食べに行くという若者がいる。創業は明治二十七年頃。以来百二十五年、今治の人々の胃袋を満たしてきた。

「かねと食堂」の名前の由来は、創業者の名前にあるそう。桑原兼吉さんと息子の友吉さんが始めたお店、「二人の名前から「かね」と」として「かねと」なのだという。初めて聞いた店名の由来に驚いていると「聞かれたら答えるけど、滅多に聞かれんけん、あんまり話したことないよ」と五代目店主 桑原孝さんが笑う。そのくらい地元の人にとって「かねと」が「かねと」であることは当たり前前の存在なのだ。

創業以来、店は幾度の戦火を乗り越えてきた。先の大戦では今治空襲によって焼野原と化した市街地に、終戦後まもなく掘り立て小屋で営業を再開。食べ物の無い時代だったので、つくったそばから飛ぶように売れたそう。今の店構えになったのは昭和二十七年頃のこと。「今こそ、周りに銀行やビルや大きな建物があるけど、当時は何もなかったけん、ものすごく大きな店が建ったという印象



昔ながらの雰囲気が残るかねと食堂

「かねと食堂は、うどんと日本そばから始めたお店、智恵子さんが嫁いできたあとで中華そばが増えたそう。その後、カレーやオムライス、カツライスなどのメニューは増えたが、四代目以降はほとんど変わっていない。孝さんは跡を継いだ時に「変えない」ことを決めたという。新しいメニューをつくるなら、流行りを追いかけてどんどん変えていかなければならない。しかし、それはキリがない。ならば、変えない。孝さんのゆるぎない決断が今のかねとの信条だ。



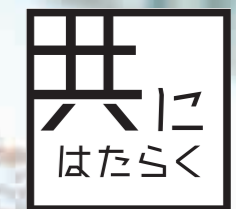
「先払いか、後払いか。」

昭和四十年代、今治港界隈は大いに賑わった。大洋デパートがあり、今治センターがあり、今治大丸があった。映画館も数軒あったそう。商店街は人だらけで、すれ違う人と肩がぶつかるくらいだったと孝さん。その中心部にあったかねと食堂もまたたくさんお客で大賑わいだったという。店員が各テーブルまで注文をききに行く暇がなかったので、前金制度にしたそう。お客さんは、入店後番台で注文をして代金を払ってから席につく。食べ終わるとすぐに出ていくことができるので、忙しい客側にとっても前金制度は喜ばれたそう。今は前払いでも後払いでもどちらでもいいらしい。当時の名残で今でも先に支払いを済ませますお客さんと、食べ終わってから払って出ていくお客さんがいる。よく把握できているなど感心していると「もらい忘れとることもあるかもしれんねえ(笑)」とおおらかだ。店とお客さんとの信頼関係の上に成り立っている。

「今の時代、選択肢はいくらでもある。流行りはめまぐるしく変わっていくし、人は目新しいものに飛びつくけど、すぐに飽きる。残るものだけ本物やと思うんよね。」孝さんの言葉が胸に染みだ。



左上:今も現役のうどんを打つ機械。これで毎日うどんとそばを手打ちしている。上中:変わらないメニュー表 右上:昔ながらのうどんはいりこだしの風味豊かなやさしい味。奥はいなり寿司。左下:番台のようなところに座って注文を聞き代金を受け取る智恵子さん。下中:今の店構えになったのは昭和27年頃。当時はかなり目立つ建物だったという。右下:だしの決め手となる、うるめいりこ。



Case.04

達川ベーカリー

創業50年以上の店を訪ねて

もちりふんわり食感の昔なつかしいドーナツ

町の日常に溶け込む



店主達川謙次さんの朝は早い。いや、朝ではない。深夜十二時半、皆が眠りにつく頃に起き、パン作りを始める。朝七時の開店に向け肅々と作業は続く。焼き上がったパンは、アルミトレイに行儀よく並べられ、朝日とともにお客さんを迎える。

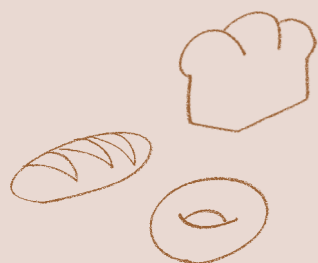
午前中で
売り切れるパンも

「お目当てのパンがあるときは、午前中が勝負よ。午後から行っても売り切れとるけんね」常連客からそんな話を聞いた。その通り、開店からひっきりなしにお客さんが訪れ、途切れることがない。近所の人はもちろんのこと、遠方からもお客さんが買いに

はやみつきになる。どのパンも懐かしくほっとするような味わいで、ひと口ほおばると子ども頃の記憶がふと甦る。

客足が少し落ち着いた午後、妻の政江さんは一度自宅に戻り、代わって息子の兼太郎さんが店頭に立っていた。県外の大学に通っているが、長期の帰省中は店を手伝っているのだという。明るく、人懐こい笑顔でお客さんと話をする姿が頼もしい。跡を継ぐのかと聞かれることも多いようだが、「じいちゃんに継いでくれて言うんですけど、父は何も言わないですよ。」と笑う。隣で謙次さんが照れくさそうに目を細めていた。

気負わず、時代の流れに逆らわず、しかし決して媚びず、ぶれない。達川ベーカリーのパンはそういうパンだ。毎日食べたい、家の近くにあってほしいなと思える町のパン屋さんは、今日もたくさんのお客さんの笑顔であふれている。



左上:香り高い食パン 右上:棚の上には引き取りを待つ予約済みの食パンが並ぶ
左下:3代目達川謙次さん(右)と息子の兼太郎さん(左)

やってくる。驚いたのは、食パンの予約。名前を貼られた袋が棚にずらりと並べられているのだ。すぐ売り切れになってしまうことがあるため、確実に手に入れたいお客さんは事前に予約しているのだという。電話での予約と来店時に予約をしていく人、そしてパンを買いにやってくる人。レジを打つ奥さんも大忙しだが、「今日はそんなに忙しい方ではないですよ。暇なくらい(笑)」と余裕の笑顔。これが達川ベーカリーの日常なのだ。

この味、あの記憶。

達川ベーカリーは、謙次さんの祖父が一九六九年頃に創業した。以来五十年以上の長きにわたり、地元の人達に愛され続けている。店頭には並ぶパンは日によって変わるが、五十種類以上はあるという。一番人気は、「フランスクリューム」。ソフトフランスの生地ふわふわのバタークリームをたっぷりはさんだパンで、もちりした生地の旨味とクリームの甘さが絶妙。大量買いするお客さんも多いそうだ。砂糖をたっぷりまぶした昔ながらのドーナツや、揚げパン、カレーパンも人気。幻のパンと噂される「シャノン」は、甘いバターをたっぷり練り込んだデニッシュ風のパンで、濃厚な味わい

THEME 3

共に育む

今治市には、50近い数の保育園や幼稚園、小学校は26校、中学校は16校ある。県立高校、私立高校、短大、4年制大学もあり、教育機関の多さも特徴にあげられる。穏やかな気候、豊かな自然と、優しく見守ってくれる人々に囲まれ、子どもたちはこの町で心豊かに成長している。



File.01



子どもたちに、多様で独創的な体験を。

今治高等学院 学院長 豊島吾一さん

豊島吾一さんは多才な人だ。まず、プロフィールがよくわからない。「今治高等学院の学院長」でありつつ、スティーブルバンドのリーダーであり演奏者、野外音楽フェス「ハズミズム」の主催者、雑貨店「うお駒」の経営者、「今治ホホホ座」の代表として今治市の中心市街地活性化のために活動をしている。肩書が多すぎる。

豊島さんは今治市生まれ。東京の大学に進学し、卒業後は都内の眼鏡店で勤務、二十六歳の時に今治にUターンした。その後、塾を経営する父親と共に、「今治高等学院」を設立する。今治高等学院は生徒数二十人ほどの小さな高校。通ってくるのは、学校になじめなかつたり、障がいがあったり、学校がすこし苦手な子どもたちだ。その中で豊島さんは学校での勉強だけでなく、イベントの手伝いをしてもらったり、音楽に触れさせたりしながら、大人と接することや社会



生徒たちによる音楽ライブ



楽に
らなかったこんな



に出ることを面白いと思ってもらえるような体験を提供している。

様々な事情で高校に通えなくなつた子どもたちだが、自分の好きなことを大切にしながら学び、高校卒業資格を取得して次のステージへ進んでいく。英検準2級に合格し、この春から大学へ進学するという女子学生もいる。これまでに八十名を超える生徒がこの学校から社会に飛び立っていった。今も十六名がこの学び舎でかけがえのない時間を過ごしている。

豊島さんはこの春、新しい事業をスタートさせ、さらに肩書が増えた。それが、障がいのある子どもたちを預かる福祉サービス「放課後等デイサービス アマカラ研究室」だ。「アマカラ」は、アソビ・マナビ・カラダの頭文字。どれも成長に欠かせないもので、自由に遊び、創作し、学ぶことができる環境で子供の持つ力を伸ばしていこう、というのがこのモットー。「ハズミズム」や「今治ホホホ座」などの活動を通じて豊島さんが知り合ったアーティストも時々遊びに来て子どもたちと時間を過ごす。「支援する側とされる側、という構図はなんか違うと思うんです。」と豊島さん。今治高等学院もアマカラ研究室も共通するのは、誰もが教える側になるし、教わる側になれること。人と違っている



野外音楽フェスハズミズム(写真上):「ハズミズム」は2013年よりスタートした“大人も子どもも一緒になって音楽を楽しむ”をコンセプトにした、子連れでも気軽に参加できる音楽フェスティバル。



ことは個性。それを体現する大人たちとのかわりによって、子どもたちは他人と比較するのではなく、自分の中のワクワクすることや好きなことを大切にして生きていく姿勢を学ぶことができる。

「福祉」という言葉に距離を感じる人もいるだろう。しかし、自分ごととして考えると、それは身近な存在になる。自分も障がいを持つことになるかもしれない、そうでなくても病気になるったり怪我をしたりしたとき、生活をする上で困ることはたくさん出てくる。「困っているからちょっと手伝ってほしいか?」そんな風に声をかけたり、気軽に手を差し伸べたり、互いが自然に助け合い、繋がることのできる社会でありたい。マルチな才能を発揮しつつ、型にはまらない豊島さんの幅広い活動の目的は、究極的には、誰もが等しく幸せに暮らせる社会をつくること、なのかもしれない。



THEME 3
共に育む



File.02 

新しい大学で
ラグビー部をつくる

岡山理科大学 獣医学部 獣医学科
ロス・ルーシー・桃子さん



「両手でしっかり!」もつと腰を落として!大きな声を出しながら、先頭に立ってグラウンドを走り回る女性。体当たりのタックルなど男子学生顔負けのトレーニングを軽々とこなすパワフルな彼女が、開学したばかりの大学にいち早くラグビー部をつくったロス・ルーシー・桃子さんだ。

ルーシーさんは、東京都生まれ。イギリス人の父と日本人の母のもと、五歳から香港で暮らす。香港の高校を卒業後、祖母の介護のため母親の実家のある今治に帰郷した。

香港では英語中心の生活。小学生の頃から、毎年夏休みに今治に来て一カ月ほど地元の学校に通っていたため、ある程度の日本語は理解できていたが、上達したのは今治で暮らした

後は今治でもラグビーを広めたいと、積極的に部員を勧誘して創部に漕ぎつけた。

現在部員は男女合わせて九名。初心者が多いので、まずはラグビーの楽しさを知ってもらおうと、自らトレーニングメニューをつくり、部員たちを丁寧に指導している。短い休憩をはさみながらおよそ一時間半、動きっぱなし、走りっぱなしの練習は、かなりハードだ。それでも、グラウンドには笑い声が響く。ラグビーはチームで戦うスポーツ。体が大きくても小さくても、足が速くても遅くても、それぞれ活躍できるポジションがあるという。高い精神性や、仲間とのチームワークといった一生の財産を得ることもできる。今治の小さなキャンパスで、ひとりの女子大生が生み出した小さな輪は、今、たくさんの仲間を集め、笑顔の大きな輪を広げている。

始めて学友や多くの人と関わるようになってからだそうだ。今の生活はすっかり「今治弁」。彼女の口から出る「○○やけん」という今治弁に驚く人も多い。

獣医を目指したのは、動物好きの両親の影響だという。「両親は弱った犬がいると最期くらいは幸せな時間を過ごさせてやりたいと自宅に引き取り世話をしていました。そんな姿をみているうちに、自分も大きくなったら獣医になって病気の動物を治してあげたいと思うようになりました。」そして、第一期生として、岡山理科大学獣医学部に入學。大学の勉強は専門性が高く、授業についていくことに必死で余裕がないと苦笑いしているのが、ラグビーで仲間とともに汗を流す時間だ。

ルーシーさんのラグビー歴は十二年以上。八歳の頃に父親の知人がコーチを務めるクラブチームの体験会に行ったことがきっかけだ。一緒に行った友達は辞めてしまったが、ルーシーさんはそのままクラブに入部。すっかりラグビーの楽しさに魅せられたそうだ。その実力は折り紙つき。女子ラグビーの香港代表選手として活躍し、来日してからも国体に出場して、好成績を残している。大学入学

ルーシーさんのノート。
トレーニングメニューも
彼女が考えている。



タックルやパスの
指導をするルーシーさん。



あなたの I'm into をおしえてください!



I'm into 今治タオル



I'm into しまなみリズム&自転車リズム



I'm into KAIZOKU



I'm into 今治食材



I'm into スタイルカウンセラー



I'm into 製菓



I'm into バレエ



I'm into 農業



I'm into 野球



I'm into 子育て



I'm into 釣り



I'm into 絵手紙

information

今治スタイル Vol.5

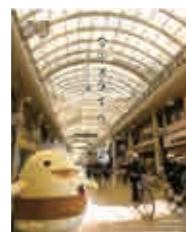
<発行>
今治市産業部営業戦略課
〒794-8511
愛媛県今治市別宮町1丁目4-1
TEL 0898-36-1554
<企画/編集/印刷>
第一印刷株式会社
〒799-1581
愛媛県今治市喜田村1丁目6-40
TEL 0898-48-8333
<お問合せ先>
今治市産業部営業戦略課
TEL 0898-36-1554

BACK NUMBER



Vol.1 2015年12月発行

遠いところようこそ
FC今治オーナー岡田武史氏インタビュー/今治に魅せられた人々
〜1ターンUターン者/今治タオル・佐藤可士和氏 他



Vol.3 2017年12月発行

ロケーション編
映画やドラマのロケ地を巡る
小説「天使は奇跡を希う」の舞台



Vol.2 2016年12月発行

産業編
モノづくりの原点はヒトである
造船産業/タオル産業/食品産業
観光産業/伝統産業/農業



Vol.4 2019年1月発行

後世に残したいもの編
町並みをゆく/神々が宿る祭り
と伝説/伝えていきたい、郷土の味
/実は…今治って建築がアツいんです!
/ティープなまちなか探検

アイアイ今治キャンペーンって!?

I'm into Imabari ! (私は今治に夢中です) がキャッチコピーのアイアイ今治キャンペーンは、みんなで今治市を盛り上げ、つい夢中になってしまうような今治の魅力を広く世界に発信しよう! という活動です。
キーワードは「共創」。業種間、企業間、地域間いろんな垣根を越えて、みんなが知恵を出し合い行動を起こすことで、新たな人の流れやおもしろい化学変化を起こし、今治をもっと元気な町にしていこう! というもの。
共創の第1弾は、タオル×農×食のコラボとして「今治タオルカフェ」がOPEN。第2弾はサイクリング×スイーツ=今治新名物スイーツ、その名も今治プレスト(バリプレスト)の誕生! 今治プレストは、世界最古のサイクリングイベントバリプレストパリにちなんだ自転車の車輪リング状のフランス銘菓バリプレストに着想を得て、今治産食材などを使用し、今治市とかかわりのあるお店で販売するリング状のスイーツです。他にも今治を盛り上げるためのアイデアを広く募集する「アイアイ今治ブランプリ」の開催など、続々と新しい取り組みがはじまっています!



アイアイ今治キャンペーンロゴマーク

インパクト抜群のキャンペーンロゴは、「i.i.imabari!」の「i」と「i」が互いに弾け合っているようなデザイン。人と人のアイデアやひらめきの「共創」を表現していて、さらに今治の祭り「おんまく」で勢いよく打ち上げられる花火のイメージを重ねています。



佐藤 可士和 氏

1965年東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。クリエイティブスタジオ「SAMURAI」代表。慶應義塾大学特別招聘教授。企業、商品、空間、地域再生など多岐にわたる領域でトータルプロデューサーとして活躍。文化庁文化交流として日本の優れた文化、技術、コンテンツを広く海外に発信することにも注力している。著書に『佐藤可士和の超整理術』(日経ビジネス人文庫)、『佐藤可士和の打ち合わせ』(ダイヤモンド社)など。

今、今治が面白くてたまらない。
サイクリストの聖地として名を馳せるしまなみ海道、日本遺産の村上海賊、名物・今治焼鳥や瀬戸内海産の海産物、農産物に美味しいスイーツ、目の離せないFC今治、「日本美しい島・大三島で暮らすプロジェクト」の展開、大人気のバリイさんに、JAPANブランドとして進化を続ける今治タオル、、、今治には面白いモノ、コトがあり、それをつくっている面白い人がたくさんいて、なんとも魅力的なパワーを発しています。
「I'm into Imabari !」は、「私は、今治に夢中です」「私は、今治にハマっています」という意味。知れば知るほど、触れれば触れるほど今治にハマる、、、僕自身も感じているそんな思いを、この言葉に託しました。
今治には、今治を愛する人、ここから面白いことを発信する人、そんな今治に惹かれて訪れる人など、多くの「I'm into Imabari !」な人が集まっています。この今治のパワーを全国に発信しよう! と、ロゴは、元気で明るく勢いを感じるポップなデザイン。センターは、今治の人、今治に夢中になっている人をイメージしつつ、今治を面白くしている個々のコンテンツの弾むような楽しさや、共創から生まれる新しいアイデアのひらめき、そして今治市民のまつりである「おんまく」で空高く上がる花火を表現しています。今治に関わるすべての人が発案者であり、発信者であり、担い手である「共創型今治モデル」のシンボルとして、「I'm into Imabari !」が輪のようにめぐって大きなムーブメントとなるようにという願いも込めています。

佐藤 可士和